

レール

夏の夕暮はもの憂い色彩のなか
列車の揺れに身を任せて君は
目を細め、窓の外に何かを見つめている
通り過ぎる川の流れでもなく
眩しい光のシャワーでもなく

それはきっと世界が創られたその時から
ずっと流れて続けてきた何かだ、という気がする
そして、それ以上知ろうとは思わないよ
ただ、感じていればいい、ほのかに
言葉にすれば嘘になる、と知っているから

お眠りよ、疲れた時には
今はそっと見ていよう
オレンジ色に染まる君の寝顔を、
お眠りよ、少しの間全てを忘れて
今はそっと感じていよう
おだやかな君の寝息を

(1984.7.30)